第3種郵便物認可　1990年8月21日

新ゆめ田舎びと <1>

星が降る

農業志し 野辺で家づくり

近所の人ら 作業を応援

お盆。今井和夫(三)の家に、いっときの喧騒（けんそう）があった。

子どもが四人。大人七人。明石から両親と兄が来て、横浜から姉夫婦と、その子どもたち。十三日夜。列島の「ふるさと行」が、初めて自分の周りで起こっているのを感じながら、和夫は義兄の言葉を聞いた。

「和夫さん、よくここまできたなあ。手づくりで家を建てるなんて」

母(六四)は、嫁のひさ代(三三)に向かって「あの子には小さいころからびっくりさせられてばっかり。大変なのは、あんたよ」。

赤いとんがり屋根の洋風ロッジは、もうやみの中に消えようとしている。深い山に囲まれた山村、宍粟郡千種町岩野辺。気温二五度。

大阪から引っ越す

新居での生活は十一日、スタートした。大阪から引っ越して来て一年四カ月。農業を志して中学教師をやめ、妻と二人の子どもと最初に落ち着いたのが役場近くの町営住宅。去年の春だった。

千種での活動は、「農」とともに「家」から始まった。

わらぶき屋根に、あこがれがあった。農家の廃屋探しが二カ月。見つからない。かつて、和歌山県の山村に移り住んだ人を訪ねて、手づくりの家を見たことがある。「いざとなったら、自分でつくれるんだ」。住宅づくりの本を買い込んで、読んだ。大工の経験は、むろんない。収入を得るため始めた土木建設作業のアルバイトは、住宅のコンクリート基礎づくりを体験させてくれた。

昨年九月、地鎮祭。何回か、設計を繰り返したあげくだ。単調な基礎工事。十月十二日、材木到着。前夜は興奮して眠れなかった。人手が必要な作業には、近所の人たちの応援があった。棟上げに、隣保から続々と祝いが届く。

「都会なら、こんなことあるやろか」――。岡山県境にある日名倉山（標高一、〇四七㍍）に雪が降り出していた。

思いこもるわが家

和夫の思いが詰まっている家。建坪―約百五平方㍍。間取り―一階に六畳の土間、十二畳のダイニング、十五畳の吹き抜けの居間。それに、星空の見える広いおふろ。屋根裏部屋は二十四畳だ。土地は借り物。建築費に五百万円を

かけた。

ひさ代が、明石の夫の実家に電話を入れたのは、引っ越した翌朝だった。

「きのうの晩、あの人、酔っ払って泣いでたんですよ。『この降るような星、みんなに見せたい』って」

電話を受けた母は、その日のうちに長男の車で千種町にやって来た。

野菜は全部自家製

一年ぶりの家族そろっての夕食。焼き肉パーティーは午後六時前に始まった。

肉は買い込んだ。ピーマン、ニンジン、シシトウ、インゲン、ナスビ…。野菜は、自家製だ。夕食前、家族総出で収穫した。直径五㌢はありそうなキュウリ。赤々としたミニトマト。サラダは、みずみずしい。

「野菜の歯ごたえが違うね」

「ふろ、温泉気分やな」

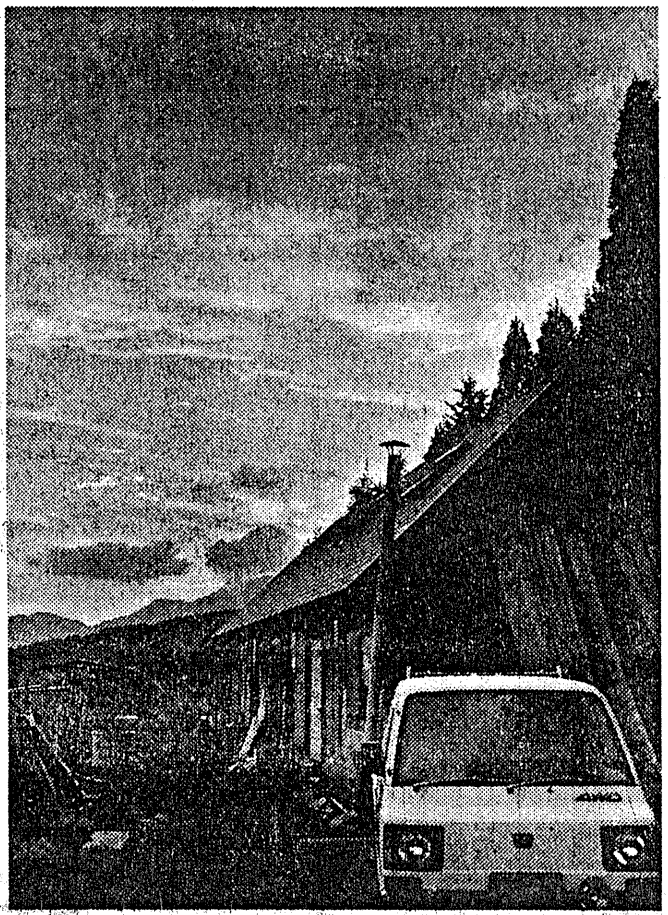
ひとつひとつの言葉が、和夫に「田舎」を実感させている。

お盆が終わる。家族四人だけの生活が、再び始まった。

◇

播磨地方山間部だけでも、脱都会組の「新田舎人」は十家族といわれる。都会にない安らぎを求めるのか。人の心の底に、だれしもある「あこがれ」なのか。この一家を通して「ゆめ新田舎人（しんいなかびと）」を探ってみたい。

（文中敬称略）



県境の山に夕日が沈む。大阪から移り住んだ一家の新しい生活は、始まったばかりだ
＝宍粟郡千種町岩野辺で

第3種郵便物認可　1990年8月22日

新ゆめ田舎びと〈2〉

教師やめ脱都会を決断

頭ごなしの管理が嫌に

前進のみ

和夫は一人で、明石市の両親の家を訪ねた。「おれ、教師やめるわ」。一九八八年、どんより曇った春先のことだった。

「何を考えてるの。二人目の子どもが生まれる前なのに」と母（六四）。教師になって間もないころ、和夫が三十歳までの仕事だ、と話していたことが、頭の中をめぐった。「大丈夫や」。和夫は口ぐせになっていた言葉を何度か繰り返した。

和夫は大学時代、空手に熱中した。四年生の夏、リクルートスーツがオフィス街に繰り出すころも、そうだった。

就職せずに世界各地を転々とし、働いては次の町へ行く。また働いて資金を稼ぐ。そんなことを夢見ながら、卒業後しばらくはアルバイトでついだ。

よその世界見たい

大学卒業後二年がたった八二年四月。大阪市教委から辞令を受ける。中学校教員。定職を持ってほしいという両親の願いがきっかけだが、世界を放浪できなくても、生徒や親と接すれば自分の知らない世界が見えてくるのでは、と思った。

「教師は向いていない」と思い出したのは、三年目のころだった。朝礼で並ぶ生徒に「おい、服装ちゃんとしろ」「きちんと並べ」。頭ごなしに生徒を管理する嫌な教師になっている自分、を見た。沈みこんだ生徒を見つけても、声をかけてやれない。腰が重く家庭訪問が出来ない。次の朝、その生徒の顔を見かけ、すまない気持ちになることがある。

八八年三月、大阪市立生野中学校をやめた。

農家への手紙13通

その秋、県内に住む農家の人たちに十三通の手紙を書いた。千種町岩野辺の森脇信行（四一）も、その一人。

「大阪から移り住んで農業、自然養鶏を始めるための土地を探しています。近くに貸してもらえるところがあるでしょうか」

後に有機農業の師となる森脇からの返事は「都会からの脱出」を決定づけた。

「農へのいざない」には、父（六）もの支えもあった。「今井和夫　三十歳　ゆったりと鶏の飼える土地を探しています」。黄色い名刺大の紙にワープロ文字。父は会社の同僚、取引先、顔見知りに片っ端から配った。

実践は、八八年五―十月。大阪府藤井寺市。和夫にとって、ここは農業の勉強の地だった。起床四時。空をあおぐ。雨か晴か。憂鬱で家を出る。黒々とした土の上にクワを振り下ろす。汗と泥の闘い。なまった筋肉と、痛みの走る背筋との闘い。三カ月たった夏、二またになったナスビが、目の前にぶら下がった。ゆがんだトマトもある。

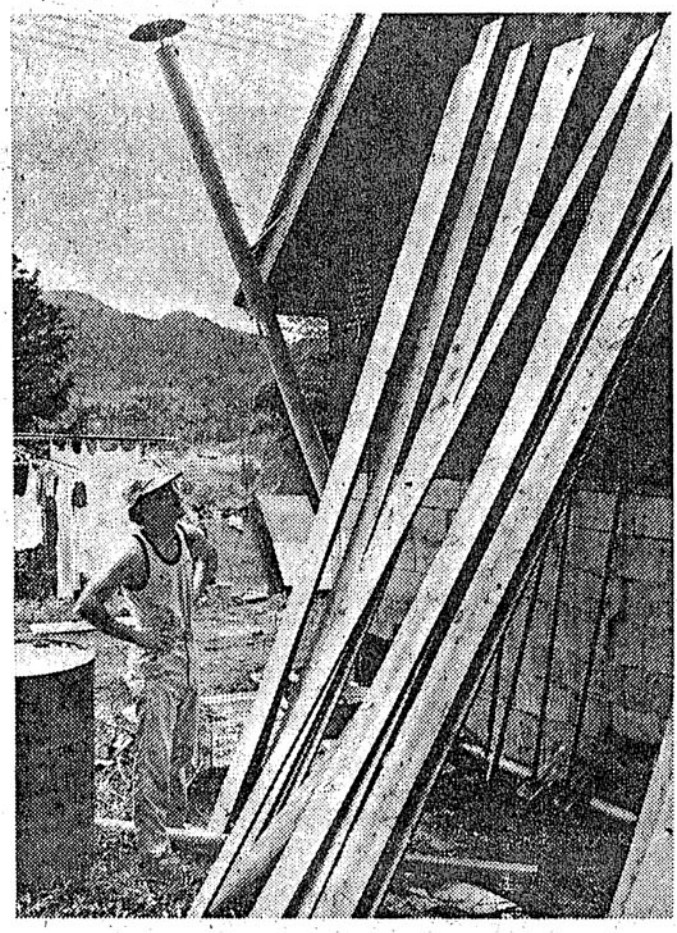
募る農業への思い

農業への夢が芽生えたのは、高校、大学のころだ。

高校二年から三年にかけて、生徒会副会長。仲間と夜の十時過ぎまで議論した。同和問題、障害者の問題。環境や公害…。自分の知らないことに関心を持つ仲間を知った。本も読んだ。大学になって、都会を離れ農業を始めた人に会った。ゆがんだ都市問題。「人間本来の、〝罪〟のない仕事は農業しかない」――。

東大阪市花園。近鉄奈良線河内花園駅から歩いて数分。住宅密集地の一角に和夫の家はあった。細い通りに面した四戸並びの一戸。千種町に向かう日、八九年四月二日、和夫は思った。前進か逃げか――。

（文中敬称略）



教師をやめて千種へ。身長164㌢、体重56㌔のきゃしゃな体で家づくり。いま、内、外装の真っ最中だ

第3種郵便物認可　1990年8月23日

新ゆめ山舎びと〈3〉

土と電気

無限の力味わう日々

四冊の日誌がある。農業日誌、作物別の成育記録、家作り記録、日々の行動記録。農業日誌は、千種町に移り住んだ三日後に始まっている。日誌をめくる。

一九八九年

四月七日　晴。朝霜が降りる。明日が雨ということで、ダイコンやインゲンの種をまく。畑は見晴らしも良く、いい感じ。まるで毎日が日曜日。

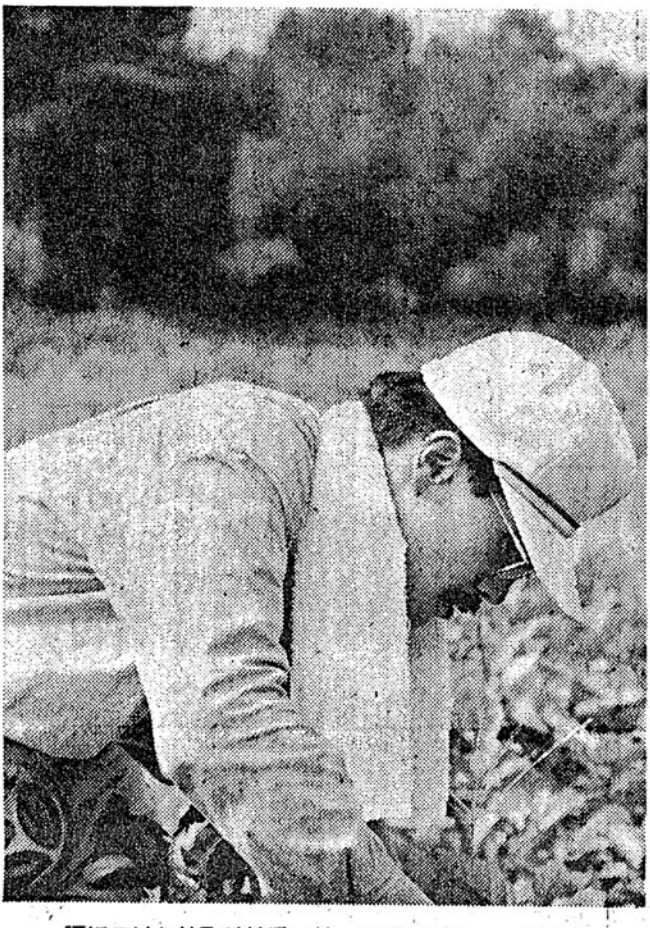
四月八日　八日ぶりの雨。休めると思ったが、肥料混ぜを手伝ってくれと電話。疲れは残る。ここの人はよく働く。

四月二十四日　雨風強し。インゲンの芽が出た。寒さでどの芽も縮こまっている。

四月三十日　インゲンが枯れている。ホウレンソウもだめだ。

五月二十九日　きのう植えた稲が土についていない。浮いている。中指で土の中に差し込むのがうまくいかない。

山の中腹の田畑は二十五ㄱ。山すそへ下り、あぜを上った段々畑の一角だ。道端にノカンゾウのオレンジの花、森からホトトギスの鳴き声…。働く場は、家から一㌔と離れていない。



腰につけた蚊取り線香。蚊、ハチ、ブヨ…。足元にマムシが出ることもある。「土との闘い」は続く

午前5時スタート

和夫の一日は、午前五時にスタートした。長そでに長ズボン。顔は手ぬぐいのほっかむり。腰につける蚊取り線香、草刈り機、カマ一。4WDの軽トラックに乗り込む。和夫は、畑で朝食をとる。真っ赤なトマトをもぎり、シャツで軽くふいて、かぶりつく。千種の山は、まだ朝もやの中にある。

農作業二時間。蚊が追いかけてくる。ブヨがまつわりつく。腰につけた蚊取り線香も、効き目は少ない。ずっと中腰の草刈り作業。空手で鍛えたつもりの体なのに、と思うことがある。

春、畑に十ㄱ当たり五百㌔の鶏ふんを入れた。野菜は少量ずつ約三十種。昨年の米の収穫は六百㌔。作物はすべて自家消費。農業による現金収入は、ない。

やはり電気は便利

「土との闘い」の一日が終わる。和夫は十二畳のダイニングキッチンにいた。電気製品がひしめいている。

冷蔵庫二台、炊飯器二台、レンジ、オーブン、テレビ、ビデオデッキ、コーヒーメーカー、天井にはシャンデリア。電気洗濯機も二台。ステレオや電気ピアノもある。

電気漬けのやましさ、を感じたことがある。「電気を使わない日」。昨秋、こんな日をつくってみた。

午後八時すぎ、部屋の真ん中にランプを置く。部屋の電気を消す。ランプに近づかないと互いの顔も見えない。本のページをめくる。読めない。「夜って暗いんやね」。どちらともなくいい出した言葉。二時間もたたずに、うんざりした。

「ある程度の便利さは必要なんじゃないかな」。和夫はそう思うが、また挑戦してみたい気でいる。

以前よりはあくせくと

現金は家庭教師で

いま、夫婦交代で四人の家庭教師をする。現金収入もいるからだ。二人あわせて、教師時代の四分の一にも満たない。「貯金を食いつぶす毎日」は続いている。都会にいたころより、あくせくしている自分が分かる。

それでも、「ぜいたくだ」と、和夫は思っている。生きている土の無限の力と、人間の本性が、せめぎ合っているからだ。

（文中敬称略）

第3種郵便物認可　1990年8月24日

新ゆめ田舎びと《4》

七菜子よ

肉から野菜食中心へ

大地で育つ子供ら変貌

七菜子。「ななこ」と読む。一九八八年四月十四日朝、東大阪市小阪の産院で生まれた。和夫が教師をやめた直後だった。名前は「野菜をよく食べるように」という和夫の思いが、こめられている。離乳食も玄米だった。

七菜子は一つの誕生日の直前に、千種町にやって来た。最初から野菜中心の食生活。インスタント食品は、口にしたことがない。

七菜子には、たくましさがある。

ハチにもけろっと

夏のある日。突然、七菜子が「痛い、痛い」と泣き出した。洗濯したばかりの服に着替えた時だ。急いで服をぬがすと、一匹のハチが飛び出す。以前、和夫がハチに刺され、はれと痛みに悩まされたことがあった。なのに、七菜子は数分後、けろっとした顔に戻った。はれもなかった。

去年の夏。ひさ代は背中に七菜子をおぶって畑の草刈りをした。炎天下、草刈り機のエンジン音も気にしないで、七菜子は背中で寝息をたてた。

「子どもたちを自然のなかで育てたい、ふるさとを持たせてやりたい」。これも和夫が一家で田舎に移り住んだ理由のひとつ。

1年の半分は発熱

七菜子には三つ上の姉がいる。絵美子さん。「家の中にいるのが好きな子でした」と、ひさ代。絵美子が生まれたとき、二人はともに中学校教師だった。

共働き—当然のことのように、食事はインスタント食品か、買った総菜が多かった。

絵美子は一年の半分、発熱していた。アトピーの症状もひどかった。肌はカサカサ。夜になるとかゆがって寝ない。かきむしって、ふとんが血だらけだった朝のことを、ひさ代は覚えている。

絵美子は六カ月のときから保育園に入っていた。ひさ代が絵美子を保育園にあずけて、勤め先の学校へ向かおうとした時だ。黙ってジーッと見つめる絵美子。「親といっしょにいられないことに、ストレスを感じていたんでしょうか」と、ひさ代はいう。

「コンクリートの子」から「大地の子」へ。和夫は、子どもたちの変貌（ぼう）を、都会脱出の成果だ、と思っている。

キュウリが大好物

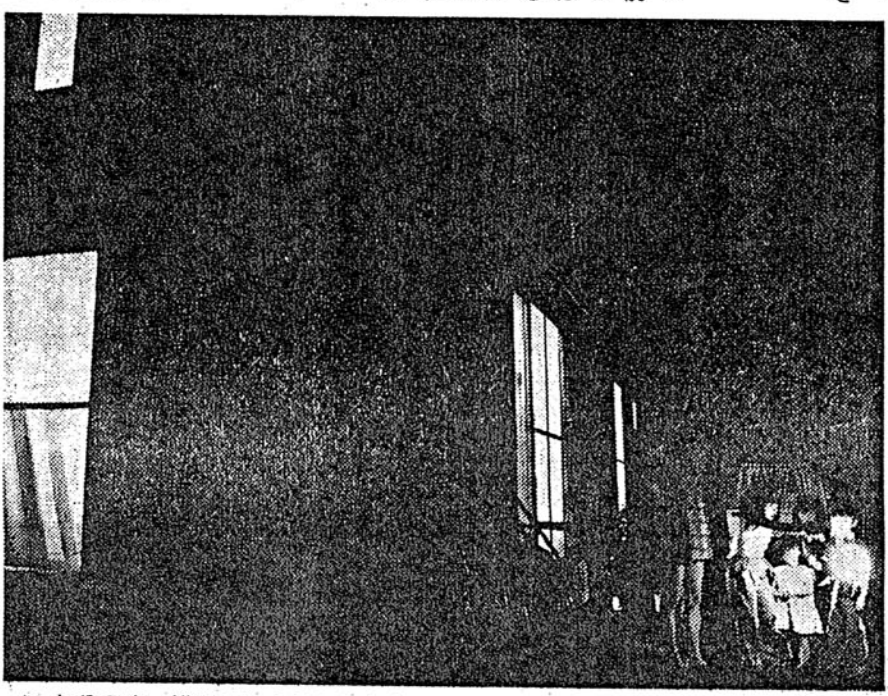
肉中心から野菜中心へ。家庭内の食生活も変わった。自家製の季節の野菜を前にしてひさ代がためいきをついていたのは、そんな昔ではない。「野菜だけで、料理なんてできんわ」。料理に味が出ない。元気がでない。そんな思い込みがあった。七菜子の大好物は、塩をまぶしただけのキュウリ。一本は軽く食べてしまう。野菜そのものの、おいしさを教えてくれたのは七菜子だった。

「肉の神話」だったのか。

「私には、いいことのすべてが田舎暮らしのせいだとは思えないんです。親の方が子どもに育てられている面もあるみたい」

明石市に住む和夫の母は、戸惑いながら、和夫とひさ代の子育てを見守っている。

（文中敬称略）



お盆の夜、横浜のいとこたちと会って花火をした。都会生まれの絵美子、七菜子は、千種の里でたくましく育っている

農民　第3種郵便物認可　1990年8月25日

新ゆめ田舎びと〈5〉

根をはる

知恵も土地も借りて

手ごたえを感じながら

「マムシが車にひかれて死んどった。よう見とけよ」。お盆の夕方、近所に住む森脇栄治(六七)が、駆け込んで来た。都会育ちでマムシを知らない和夫一家。死がいは道路に転がっていた。子ども二人は、きょとんとした顔でのぞき込んだ。

栄治は、畑仕事の行き帰りに和夫宅の玄関先で一息いれる。「六年前の大雪のときは大変やった。屋根が抜けたり、道が通れんようになったり…」。天候の話から、農作業のこつ、みそ作り方まで話し込む。栄治は妻と二人暮らし。息子は都会へ出ている。和夫は父と同い年の栄治の話に、じっと耳を傾ける。

夕方は井戸端会議

千種町に移り住んでの一年半。初めは、カルチャーショックの連続だった。

町営住宅に引っ越して来た日。トラックいっぱいの荷物の運び入れを、見知らぬ人たちが手伝ってくれた。あいさつ回り先で、「おふろにでも入っていきなさいよ」。いきなり切り出されて面食らった。

毎夕、お決まりの「井戸端会議」。棟続きの住宅前の道端に集まる。ひさ代は、できるだけ加わるようにした。うわさ話。言葉がうまく通じない。プライバシーのなさに苦痛を感じた。

隠し事のない関係

夏が過ぎて秋。地区の運動会があった。和夫一家も町営住宅の一員として参加。打ち上げの宴会で、材料を持ち寄って炊き込みご飯をつくった。アルコールが回る。和夫はギターを持ち出して歌った。「酒と泪（なみだ）と男と女」。近所の女たちは、美空ひばりや春日八郎のナツメロ。和夫は即興で伴奏した。

その夜、日記にこう書き込んだ。「互いに隠すことがない関係も、おもしろい」

千種町は、中国山地のまっただ中にある。面積の八割が森林。人口約四千五百人。うち老人が一九%を占める。基幹産業の農林業は、ふるわない。過疎対策として、町はスキー場開発に力を入れる。

この地が、和夫一家の第二の故郷。

「鍬（くわ）一本でやりますわ」。初対面の和夫の言葉を聞いて、導き役を果たしたのが森脇信行(四二)。

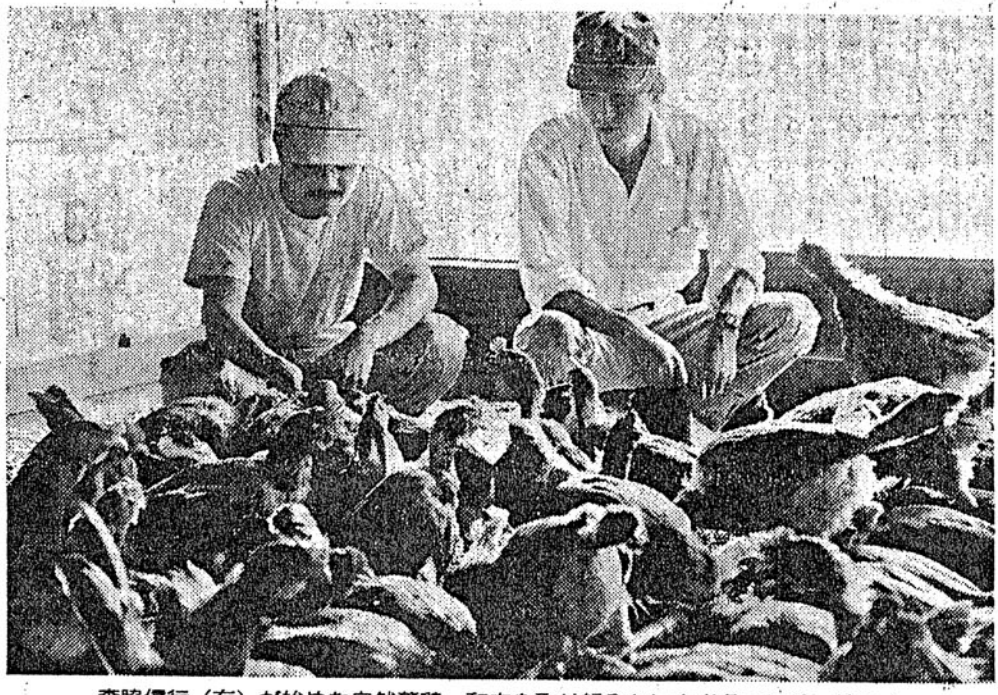
信行は千種生まれ。有機農業に取り組む。農薬を使わず、大きな機械の力を借りない。五年前から自然養鶏にも挑戦。鶏ふんは有機肥料として活用する。ニワトリが大地を自由に歩き回る。

手植えに信頼の目

昨年、初めての田植え。機械を使わず、手で淋々と行う和夫。「おままごと農業」と見る冷ややかな視線があった。信行は逆に、「本物」を確信した。それ以来、家を建てる土地探しから、農業、生活の相談ごとまで面倒を見る。いまでは、自然養鶏を目指す仲間だ。

もう一人、村留みさえ(五九)。約三十ヘクタールの田畑を、無料で貸してくれた。「よそ者に土地を貸すなんて」の声があっただけだ。共同で十ヘクタールの畑を借り、トウモロコシを植えた。今年は四千本の収穫を目指している。

「根をはり出した」。手ごたえのようなものを感じつつある和夫。生活設計に不安がないわけではない。試行錯誤が続く。（文中敬称略）



森脇信行（右）が始めた自然養鶏。和夫も取り組みたいと考えている。地の人と都会から来た人が同じ道を目指し、輪が広がる

第3種郵便物認可　1990年8月28日

新ゆめ田舎びと《6》

発信基地

友人らへ「百姓事始め」

情報広げて消費者にも

和夫は、都市へメッセージを送り続ける。

長田和憲(三三)。京都府城陽市に住む老人ホーム指導員。

去年夏、和夫からの暑中見舞いを受け取った。封を開けるとA4判の紙三枚にワープロの文字がびっしり。内容は、野菜収穫の喜び、米作りの苦労、農政への憤り、子どもの変容ぶり…。

「まるで、田舎暮らし宣言や」

高校時代、長田は和夫とともに生徒会活動で障害者問題に取り組む。大学、大学院で社会福祉学を専攻したあと、京都府社会福祉事業団の職員になった。

「あの今井らしい」

「僕もあいつもやりたいことをやっとるだけ。意外な気はしない。正直いって続けるのは難しいと思う。がんばってほしい」

品川隆亮(三三)。大手保険会社の東京本社勤務。

和夫とは大学の空手部仲間。四年生の秋、和夫は全国大会前日に「気合を入れる」と坊主頭になった。そのころ、品川らは就職活動に忙しかった。「あの今井だったらやるだろう」

品川の日常は、朝七時半起床、九時に出勤。夜八時ごろまで仕事し、残業や付き合いで帰宅は十一時を回る。休日には子どもを連れ、公園に行く。自然に接するのが楽しみだ。

畑中一成(三七)。大阪府茨木市で高校教諭。

大阪市立中学校での同僚。

「僕らは鈍感に生きているんでしょうね。都会育ちで不器用なので、農業は無理。二十年ぐらい勤めてお金をため、老後は田舎でのんびり、という夢はあります」

経歴に抱く「嫌悪」

和夫は、加古川東高校からだ。いくら書いても書き尽くせない。

深夜、和夫の家からワープロのキーボードが、軽い音をたてている。その文書フロッピーに、こうある。「百姓事始め」。友人や知人に送った、たくさんの手紙類が保存されている。

田舎からの情報発信基地になれたら、と思う。農作物配送のネットワークは友人の範囲に限られている。将来は、いつしか嫌悪にも似た気持ちを抱くようになった。もう一度やり直せるなら、大学には行かない、と思う。なぜ慶応か。「いい大学に入りたい」という気がなかったといえば、うそになる。教師を辞めるとき、同僚がいった。「慶応卒やから、なんでもつぶしは利くしな」。この言葉が頭に残る。

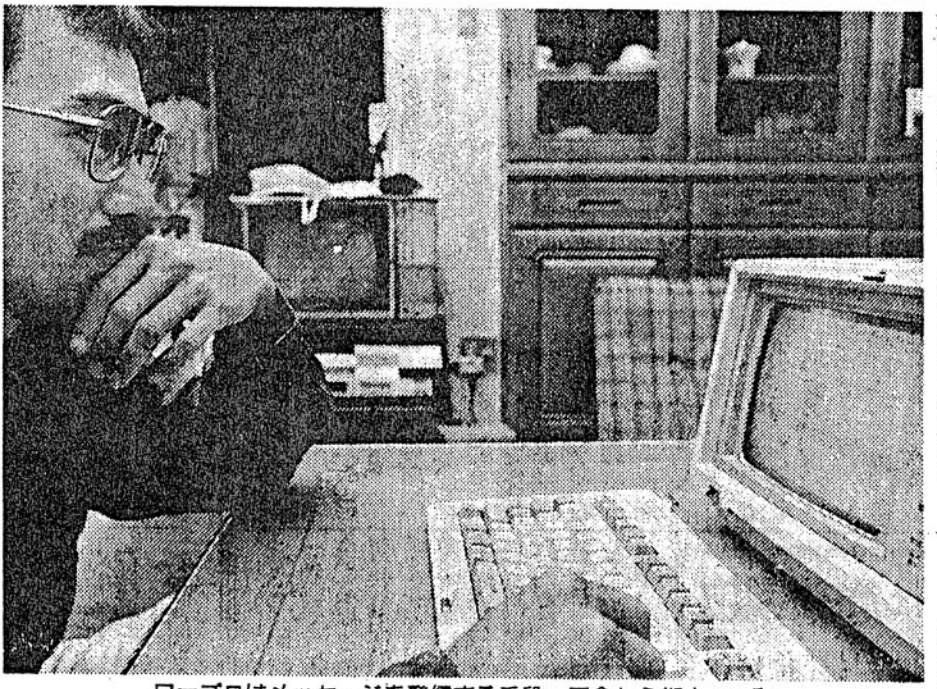
将来はミニコミも

和夫の「宣言文」は、高校、大学の友人ら約五十人に送られた。年賀状、転居通知、ジャガイモや卵の発送に添える手紙、すべてがワープロで打たれている。いつも長文になる。田舎の暮らしぶりを、少しでも知ってほしいから。

不特定多数の都市の消費者を対象にしたい。定期的にミニコミも発行したい。

和夫の言葉は、都市を撃つものになるのかもしれない。

(文中敬称略)



ワープロはメッセージを発信する手段。田舎から都市へ。和夫の思いが込められている

第3種郵便物認可　1990年8月29日

新ゆめ田舎びと《7》

共生の地

ここに住み続けたい

土の良さと人の温かさ

佐用郡上月町皆田。岡山県境近い山間部。二年前の一月、京都から移り住んだ二人の女性が、この村を去った。

山際八代美（三四）。姫路市出身。女子大を卒業後、京都で会社勤め。「農業で自給自足がしたい」と一九八二年、大学の友人や会社の同僚を誘い、上月町に土地を借りた。後に、このグループは女性ばかり四人になる。

荒れ地を開き畑にする。小屋を建てる。米、ジャガイモ、ピーマンを植える。現金収入はゴルフ場のキャディーで稼いだ。村の人に、娘のようにかわいがってもらった。

「同じこと」へ疑問

六年後の冬。彼女の結論は「意外とつまんない。私、農業に向いてない」だった。試行錯誤が楽しかった農作業も、四、五年すると要領を覚え、収穫が安定する。「何十年、同じことを繰り返すのか」

都会より自然が好きな四人だった。仲間二人が、まず山を下りた。そして――山際はいま、茨城県竜ケ崎市で暮らす。東京のベッドタウンとして開発が進む一角だ。いまも「自然との共生」の思いだけは、残っている。

「田舎暮らしの本」。脱都会の、こんな雑誌がある。三年前の秋に季刊誌として創刊、公称四万部。いま隔月刊。最新の十三号は十五万部、という。

編集部に、「田舎暮らし放棄」の話も届く。一番多いのが、地元の人たちとうまくいかない、という悩みだ。新住民の側に近所付き合いする気がなかった、感情のもつれで村人が拒絶した――と。「借りた土地が耕作に不向きだった」「農業に嫌気がさした」というのもある。

迷いも乗り越えた

和夫は振り返る。無償で田畑や家の土地を貸してくれた村の人たち。農作業の相談ができる森脇信行。泥だらけで遊ぶ子の世話までしてくれた近所の人。迷いも悩みも温かい田舎びとのおかげで、乗り越えられた。

不安はある。「引き下がれない」という気負いがない、ともいえない。

たとえば、二人の娘が結婚した後はどうなるか。自分たちが老いた後は…。将来、現実の問題として、これらは和夫の前にたちはだかるだろう。

多種多様な生物との共生を尊重……（中略）。それは大工業中心の消耗型社会とは異なり、「農」を基本とする循環型社会のはずです。

（「共生の時代」から）

一九八一年、京都精華大教員の植田劭（たかし）が、こんな本を書いた。和夫はこの本と教師時代に出合っている。

和夫の目標。

自然養鶏を始めたい。その用地を探し出さねばならない。世話になった近所の人と、ずっと親しくしたい。農業がだめでも、千種に住み続ける。

都会の人に体験を

正月、和夫は日誌にこんなことを書いた。

都会の多くの人に寄ってもらい、自然体験をしてほしい。秋祭り、キャンプ…。土の良さをわかってほしい。

和夫の遠い想（おも）い。

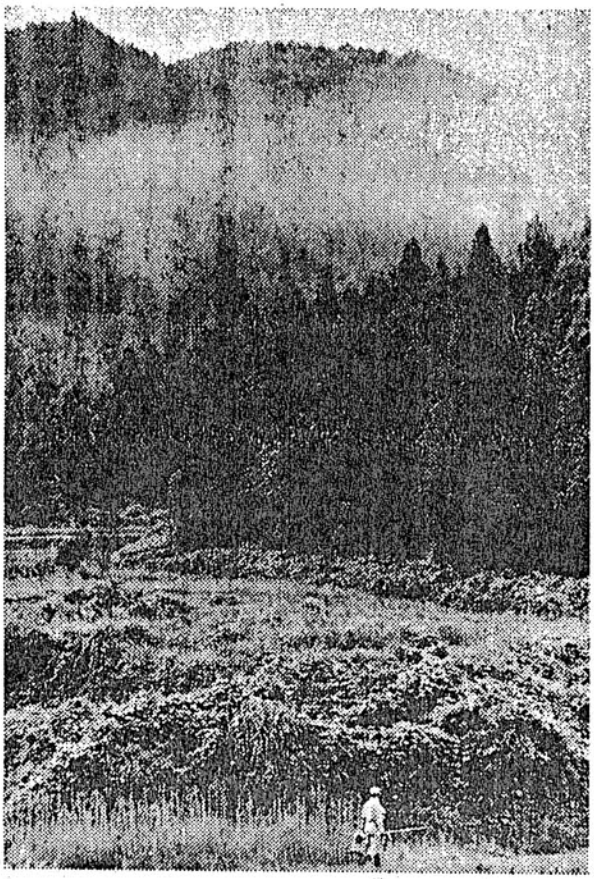
みんなが、土を耕せば、どうなるやろう。

「ゆめ」を、どこまでたぐり寄せられるか。

（文中敬称略）

おわり

このシリーズは、赤木基宏、小西正人記者が担当しました。



山、朝霧、畑。始まったばかりの「ゆめ」の暮らしに、どんな壁があるか。まだわからない